
BORDER BREAK ~ 激戦の丘 ~

とりすた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BORDER BREAK ↓ 激戦の丘 ↓

【Nコード】

N4761I

【作者名】

とりすた

【あらすじ】

人類は宇宙に恒久基地を作り上げながらも、未だに地上にへばりつきながら争っていた。 SEGAのボーダーブレイクというゲームの二次短編ですが、知らない人にも愉しめるように書いたつもりです。

ロボットや銃撃戦、チーム戦が好きな人にお勧めです。 ……………

… お金かかるけどね (TOT)

(前書き)

ゲーム設定のままだと、小説にならないので色々と変更しています。

今日も俺はここに居る。
鉄と硝煙の臭いがする火薬の庭に。

BORDER BREAK
↳ 激戦の丘↳

旧ブロー市街地。

そこは旧世界の町並みが残る、年寄りには懐かしさを覚えるかもしれない街。

そんな街に今日も銃弾が飛び交い、鉄の巨人が舞い降りる。

『いいか野郎共！ 今日こそクソツタレなEUSTのクソツタレな豚小屋を吹き飛ばすぞ！ わかったなっ！』

ヘッドホンから、クソツタレ隊長のクソツタレた命令にもなっていない命令が響く。

ちっ、同じ事ばかり聞いてたから、口調が移っちゃった。

後ろに居るBRが、俺が乗るBRの肩に手を置いた。

【突撃クソツタレ隊長殿は、今日もやる気満々みたいね】

支援兵装型BRに乗るマリーが接触回線で笑いかけてきた。冗談じゃない。

「それで割りをくうのが俺らってのが、まさにクソツタレだな」

クソツタレな隊長は、強襲兵装型BRの速度を活かした突撃ばかりするクソツタレだという事は、二回目の出撃で身に染みている。俺が乗るような重火力兵装型BRのバックアップなしで、戦線を維持出来るわけがないだろうに。

「なあキャツシュ、後ろからあいつに誤射できねえか？」

【軍法会議にかけられても良いぐらいの金をくれたらな】
「あるわけねえだろ」

隣に立っている狙撃兵装型のBRに触って、内緒話をしている間も、隊長殿はクソツタレを連呼してやがった。

『……わかったなクソツタレ共！ 全機出撃！』

強襲兵装型BRが次々にアサルトブーストを吹かし、高台から広場に向けて突撃して行く。

こっちは地道にダッシュするしかねえってのに。

「砲撃する、注意せよ」

仕方なくBRの背部に装着されたアトランタ榴弾砲を展開し、俺は無線で仲間に警告した。

BR……それは、戦争の形を変えた鉄の巨人。

二足歩行型汎用兵器、プラストランナー。

戦車の火力と、戦闘ヘリの起動性を併せ持った。人型兵器。

人類は宇宙に恒常基地を造るまでの技術を手に入れたが、今もなお地上で這ずり回りながら争っていた。

俺が放った榴弾砲が、空気を切りさきながら対岸に墮ちる。

『派手な花火だな』

狙撃位置に移動しながら、キャッシュュが電波を飛ばしてくる。

「危なさそうな所に撃ち込むのは、基本だろ？」

そう軽口をたたきながら、俺はブーストペダルを蹴っ飛ばした。

強襲兵装型とは比べものにならない程に、ノロノロ動くBR。

ま、クソツタレ隊長に付き合っただけで死ななくていいから、問題ない
んだけどな。

支援型に乗ってるマリーも、俺に合わせて移動する。

ようやく広場についた頃、市街地を横切る川で何か光った。

「……マリー、偵察機あるか？」

『どうしたの、急に』

「川の上流だ」

俺の嫌な予感が移ったのか、説明なしでマリーは背部のファルコン偵察機を打ち上げた。

偵察機から得た情報は、マリーのBRから俺のBRへ転送される。

「回りこまれてるじゃねえかっ！ 糞隊長がっ！」

モニターに映ったのは、家越しに表示された敵性BRのマーク。

『キャッシュュ！ そこから狙える！？』

『無理だっ、一分待て！』

無理と知りながら、マリーがキャッシュュに援護を求めた。
市街地のご真ん中で、高台にいる狙撃手に援護を求めるほうが間違っている。

「マリー！ リムペット撒きながら街道へ下がれ！」

でもその気持ちは判る。

こっちは重火力型と、支援型の二体だけ。

向こうは四機。しかも強襲型だ。

接近されたら勝ち目はない。

俺はECM手榴弾を投げながら、マリーを追って後退する。

愛機を重装甲にした昔の自分を呪いたい。オーバーヒート寸前までダッシュしても、追いつかれるのは間違いない。

前線にいる部隊は確実に間に合わない。

いや、あの糞隊長の事だ、気付いているわけがない。クソツタレ！

「覚悟、決めるしかねえな」

曲がり角でサワードロケットを構え、愛機に膝をつかせる。

マリーも家に密着しながらクイックスマックを準備した。

敵に支援型がない事だけが救いだ。

ファーストヒットはこっちが貰う！

十秒と経たずに、マリーが仕掛けた地雷が起爆した。

警戒せずに突っ込んでくるからだ、馬鹿メ。

吹き飛ばされた敵BRを尻目に、俺はロケットをぶっ飛ばした。

爆風で動けなかった敵BRに直撃する。これで残りは二体。

なんとかなるかもしれない。そう思ったのもつかの間、一体の強

襲型が爆炎を突っ切ってきた。

サワードロケットは威力あるものの、単発だ。連射できない。しかし武器を切り替える暇を、敵がくれるわけがない。

『カインズ！』

マリーが俺の叫びながら、クイクスマックをぶちかました。散弾を喰らった敵が、一瞬とまる。

だがその一瞬で、俺は十分な距離を稼げた。

GAXエレファント、俺と俺の愛機とともにある心強い戦友。ガトリングガンの銃身が回り始める。

「喰らええええっ！」

銃弾が敵BRに吸い込まれていき、目の前で爆散する。

「ありがとよマリー、助かつ」

俺がそこまで言った瞬間、手榴弾がとんできた。

俺もマリーも、あと一体残っていたことをしていたのに、油断してしまっていた！

『きゃあっ?!』

「うおっ!」

爆風に飛ばされながら、家を飛び越えて来た強襲型を発見した。そいつは白戦用のマーシャルソードを振りかぶっていた。マリーに向けて。

「やめろおおおっ!」

叫びながらレバーを引くが、間に合わない！

『間に合ったな』

金属が割れる音とともに、そいつは剣を振りかぶったまま、横に吹っ飛んで倒れた。

キャツシユが敵機を狙撃したと把握したのは、倒れた所に二撃目が打ち込まれ、そいつは動かなくなってからだった。

『礼は現金でいいぞ』

『遅れたくせに何言ってるのよっ！ 死ぬかと思ったじゃない』

「何にせよ助かったぜ……金はやらないが」

軽口を叩きながら、生きていることを確認する俺達。

するとモニター隅に、指令部からの着信表示が光った。

『全部隊撤退せよ、だつてさ』

『ここから見えるんだか、隊長殿は二階級特進されたようだ』

「そいつはクソツタレな程に素晴らしいな」

生き延びれたことをクソツタレ神に感謝しつつ、俺達は基地に帰還した。

俺達はここに居る。
鉄と硝煙の臭いがする火薬の庭に。

(後書き)

楽しんでいただけたでしょうか？

まだまだ未熟者ですので、感想等いただけると嬉しいです。

ちなみに。

これを書いている私のクラスはB5です。メインに支援を使いつつ、強襲したりしてましたが、ぶっちゃんけついでいけてませんorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4761i/>

BORDER BREAK ~ 激戦の丘 ~

2010年10月14日16時42分発行